
泣きはらしたゴーレムに

遥秋都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣きはらしたゴーレムに

【Nコード】

N7471W

【作者名】

遥秋都

【あらすじ】

少女が目を覚ますと、目の前には男性がひとり。

少女は記憶も知識もなく、そこがどこなのかもわからない。

「おはよう、レイシア」

男は少女の名を呼ぶ。

「おはようございます。あなたは、だあれ？」

少女は男の名を知らない。

ゴーレムを作る男と、少女のかたちをしたゴーレムの物語。

昨日の夜、何かをやり残したような気がして目を開けた。

夢だったのか、その感覚は現実感で塗り潰される。目に見えたのは曖昧な記憶ではなく、自分を見下ろしている男の顔だった。

「やあ、おはよう」

声をかけられたのは、ベッドに行儀よく寝そべる少女だ。可憐な、と言って差し支えない整った顔立ちは、少し人間離れしている。

「……」

少女は声を出そうとして、うまくできないことに気がついた。喉に栓がされているようで、背中 of 辺りがむずむずする。

「無理しなくていい。ゆっくり。ほら、水でも飲んで」

ベッドの脇に立っていた男は、側の小さな机から水差しを取り上げると、逆さまになっていたコップに注ぎ込んだ。

寝たまま、少女は部屋を見る。小ぢんまりとした木造の部屋で、ベッドの他はクローゼットと本棚、そして男が腰かけている椅子しかない。水差しが置いてあった机は、よく見たら小さなタンスだった。

「ほら」

少女は男に促されるままコップを受け取り、口をつけた。冷たい水を飲み込んで初めて、ひどく喉が乾いていたことに気づく。

結局、コップ一杯の水を一口で飲み切ってしまった。

「まだ飲むかい？」

コップを返しながら、少女は首を横に振る。

「大丈夫」

「そうか。それじゃあ改めて」

男は水差しに蓋するように、コップを逆さまに乗せた。それからこりと笑みを見せる。

「おはよう、レイシア」

「おはようございます。……あなたは、だあれ？」
少女は首を傾げた。

男は言った。

「私はラウリス。君の父親だ。でも厳密に言うと父親じゃない。もつと言えば、血の繋がりが無い。ゴーレム、と言ってわかるかな？」
少女には何のことかわからなかったので、素直にかぶりを振った。格好はパジャマのままだが、今の少女は体を起こして椅子に座っている。さらに両手でマグカップを抱えて、一心に中のコーンポタージユを冷ましていた。

「そうか。ゴーレムというのは一種の人形でね。マナという特殊な力で動く魔法の生き物だ。そして、私はゴーレムを作る仕事をしている」

一口分、こくりとコーンを飲み込んで、少女はラウリスに目を向けた。

「わたしが、その？」

「そう、ゴーレムだ。もともとゴーレムというのは伝説に出てくる魔法人形なんだ。あらゆる命令を聞く万能の小間使い……と言ってわかるかな」

「なんとなく。わたしは小間使いなの？」

「現実のゴーレムは万能には程遠い。でも、現実でも小間使いのように使われる場合が多いね。貴族の間では、高性能な、つまり高価なゴーレムを連れて歩くのがステータスになってるくらいだ。でも、君はそういうのとは違う」

少女は頭を横に傾けて、話の続きを促した。口がコーンポタージユで塞がっていたからだ。

「君の名前はレイシア。私がつって、ついさっき目を覚ました新型ゴーレムだ」

「……………新型ゴーレム？」

ラウリスは微笑んだ。少女を見ると、彼は必ず微笑んでいた。

「今、この国で作られているゴーレムはね、ある程度の知識や能力をもって生まれるんだ。すぐに小間使いとして働けるようにね。でも君は違う。体は、およそ十四歳ほどの性能だけど、中身はもう少し幼い。最低限の知識しか与えていないからね」

「わたしはだめなゴーレムなの？」

「逆だよ。今は少し知識が乏しい代わりに、レイシア、君には知恵がある。あらゆることを吸収して成長する柔軟な力だ。まるで、人間のようだね」

少女はマグカップを置いた。中のポタージュを飲み干したのだ。手を膝に乗せて、きゅつと握る。

「だからわたしは、何もわからないのね。ここがどこで、あなたが…… ラウリスがわたしの何なのかも、覚えてなかった」

「大丈夫だよ。ここは私の家で、つまり君の家だ。そして私は、君の父親のようなものだ」

「のよななもの？」

「私は君を作っただけだからね。血が繋がっているわけじゃない」
「でも」

少女は一度うつむいた。気持ちが悪く言葉にならなかったのだ。それでもなぜか、まるで喉に蓋がされていた時のようにむずむずして、落ち着かない。

「でも……のよなものなら、もう、そのものみたいなものでしょ？」
「？」

「え？」

「ラウリス」

「なんだい、レイシア」

少女は顔を上げて、ラウリスを正面から見つめた。やはり彼は微笑んで、まるで愛娘を見つめるような優しい目を見せていた。

だからたぶん、間違えてないと、少女は思った。

「お父さん、って呼んでもいい？」

ベージュの靴下が無造作に置かれていた。というよりは、ずさんに放り投げられて、床にくたりと着地したように見えた。

細い指先でそれをつまみ上げて、腕に抱えていたカゴに放り込む。

「もう、お父さん！」

少女は　レイシアは顔を上げて声を張り上げる。そう大きな家でもないので、相手に聞こえていないはずがない。

しかし返事はなく、レイシアは寄せていた眉の間に、さらに深いシワを作った。我知らず唇を尖らせて、もう一度声を出す。

「お父さん！　靴下を裏返して脱がないで、って言ったでしょー？」

寝室に放り捨てられていた靴下やシャツをすべてカゴに入れると、レイシアは部屋を出た。丁度、廊下を歩いてくるラウリスが見える。

「やあ、ごめんよ。ついうっかり」

「もう。今度こそ、気をつけてよ？」

「同じ間違いを何度もするのは愚か者だけだよ」

「お父さん、同じ間違い何回目？　もうわたし、数えるのもやめちゃったよ」

「つまり私は愚か者だから、そうそう治らないってことだね」

「開き直らないの！」

「あはは、ごめんごめん。　持つよ」

ラウリスがレイシアの抱えていたカゴを持ち上げる。そのまま踵を返して、並んで歩き出す。

「ありがとう、お父さん」

「なーに、大体私の洗濯物だしね」

小さな家の洗面所に向かうと、小さな洗濯機がある。これの開発にも関わった、とラウリスは豪語していた。付属の乾燥機能を使うと衣類が四つに裂けて出てくるため、現在は洗う機能だけが活用されている。

「力加減が難しいんだよなあ」

洗濯槽の上でカゴを逆さまにしながら、ぼやくように父が言った。
「シルクにコットン、レザーにウールにカシミアにビロードに合成繊維。同じ力加減で絞れば必ず裂ける。とは言え、ひとつひとつにボタンをつけて調節していたら、洗濯で日が暮れる」

「わたしの提案は？」

娘の言葉に、口をへの字に曲げる。

「火あぶりかい？ ガスがもつたいたないし、事故率が無視できないからなあ」

問題はあつても、洗濯機はそれなりに便利だ。衣服を入れて水を注ぎ、洗剤を入れてボタンを押す。すると排水が終わる頃には、びちよびちよではあるが清潔な服になる。

ボタンを押して洗濯機を回す頃になつても乾燥装置の代案は見つからなかった。その話はそれまでになつた。

ふたりで居間に戻る。この家で一番広い部屋で、ラウリスの私室と応接室と執務室と食堂を兼ねている。その雑多な用途の割に片づいているのは、レイシアの努力の賜物だった。

「うーん」

季節は初冬。これもラウリスが開発に関わつたらしい、コタツというテーブルに入り込むと、その開発者は気難しげな声を漏らした。
「どうしたの？」

レイシアは居間に併設されている台所にいた。深皿をふたつ並べて、コンロの上から小さな鍋を取り上げる。

「そろそろレイシアも、外を知る頃かと思つてね」

鍋の蓋を取ると、中に野菜のスープがたっぷり入っている。レイシアはそれを深皿に移して、コタツに運んだ。

「ありがとう」

「どういたしまして。外つて？」

聞きながら、レイシアはコタツの毛布をめくって足を入れる。

コタツというのは、テーブルの上に毛布を二枚重ね、上に天板を

置いて抑えているものだ。テーブル本体の天板には、裏側にマナ燃焼装置がついていて、中が暖かい。ラウリスの発明の中で、ゴームより役に立つものだとレイシアは思っている。

「外は外だよ。家の外、まだ出たことないだろう？」

「庭の手入れはいつもしてるもん」

「それだって家の敷地内だ。もつと離れて、街を見てもいい頃かもしれない。もう目覚めて、一月も経つしね」

レイシアは深皿の冷たいスープを見下ろした。ニンジン、ジャガイモ、レタス……これらの食材を買ってくるのは、いつもラウリスの役だった。

「わたしが買い物したり？」

「そうそう。最初は買い物くらいがいいかもしれないな」

「まだ零歳一箇月なの？」

「誰もそうは思わないさ」

「ちよつと不安」

料理も洗濯も、それほど難しくはなかった。たぶん買い物も、できないということはないだろう。でも不安なのだ。理屈ではない。

ラウリスは頷いて、娘に笑いかけた。

「それなら私と一緒に行こう。慣れたら、ひとりで出歩く練習をすればいい」

レイシアはスープから目を離して、向かい側に座る父を見る。漠然と感じていた不安が、霧が晴れるように消えていく。

「うん……。わかった。それなら、すつごく楽しみ！」

レイシアはにこりと笑った。

声をかけられたのが自分かどうか、咄嗟にわからなかった。それでもレイシアは足を止めた。

振り向くと、間違いなく自分を見ている視線と目が合う。好奇の目。面白がるような表情で、少年がレイシアを見据えていた。

「わたし？」

そう、と少年は頷く。

「君はゴーレムだね」

「うん、そうだよ」

肯定してはみたものの、レイシアは目の前の少年が何者なのかわからなかった。人間なのかゴーレムなのかすら判別がつかない。見た目は、レイシア自身よりも、いくつか歳上だろう。

彼は何の脈絡もなく話しかけて来た。レイシアは買い物かごを持って、街の変哲ない通りを歩いていただけだ。

「幼いゴーレムのような」

「生まれてまだ一箇月半なの」

「なぜひとりで外を歩いてるんだい」

「お買い物に行くところなのよ」

「ひとりで？」

「最初はお父さんと一緒だったけど、もう慣れたもん。もう三度もひとりで来てるのよ」

「なるほどね。でも気をつけて、家の外には心ない人だっているんだ」

レイシアは頭を傾けた。考え事をする時と、疑問が浮かんだ時に首を傾げるのは、彼女の癖だ。

大きな目で、少しだけ上にある少年の顔を見る。

「ありがとう。ねえ、あなたもしかしてゴーレムなの？」

「へえ、正解。でも、どうしてそう思った？」

あつさり少年は頷く。少女は少し考えた。

「うーん……今まで、わたしをゴーレムだと思った人はいなかったの。もちろん、お父さんは別よ。でもお肉屋さんでも、八百屋さんでも、誰も。だからもしかしたら、わたしをゴーレムだとわかるのは人間じゃないんじゃないかって」

「面白い考え方だね。でも別に、ゴーレムだから人間とゴーレムの区別がつかわけじゃない。たまたま僕はゴーレムだけどね」

「そうなんだ。そういえばわたしも、人間とゴーレムの区別つかないんだって」

「実は、大抵のゴーレムは見ればわかるよ。あまり元気な目をしていないし、人間のように表情豊かじゃない。中には首輪をつけられているものもある」

「首輪？」

レイシアは驚いて目を見開いた。父は自分に首輪をつけようとしたことはない。街で見た首輪をしている生き物と言えば、ペットの犬くらいだ。

「そう。ペット扱い。ゴーレムには様々な用途があるんだ。君のように家政婦に勤しむものもいれば」

「わたし家政婦じゃないわ」

「そう？　じゃあ君のお父さんの娘なんだね。それは幸せなことだ」「家政婦のゴーレムもいるの？」

「それだけじゃない。観賞用、奴隷、ゴーレム闘技というのもある」「闘技？」

「ゴーレム同士を闘わせて遊ぶのさ」

「そんな」

「そういうものなんだよ。だから君は恵まれている」

「……あなたは？」

レイシアは急に不安を覚えて、訊きながら一歩距離をおいた。目の前の少年が「心ない人」ではない確証などない。

「まだ名乗ってなかったね。僕はイシユド。超高性能ゴーレムだよ」

少年は、どこか誇らしげに言う。

「超高性能？」

「そう。空を飛べる」

「えっ！ ほ、本当に？」

「目からビームも出る」

「ええ！ それは……大丈夫なの？ まぶしくないの？」

「大丈夫。この眼球がぐるりと回ってね、反対側から出るんだ」

「うわ……ちょっと怖いね」

「と、こんな具合に嘘をつけるくらいは高性能なのさ」

「えー」

レイシアは盛大に肩を落とした。ビームはともかく、空を飛べるのは素敵だと思ったのだ。

レイシアの恨みがましい視線は軽く受け流して、イシュドはわざとらしく肩をすくめて見せた。

「僕は政府で働いてるんだ。王宮の偉い人が主人でね、他のゴーレムに比べればかなりの自由をもらってる。こうして街中をぶらついて、女の子に声をかけるくらいね」

「そんなことしてるの？」

「レイシアのことだよ」

「あ、そっか」

「それにしても、君もかなりの高性能だね。まるで人間のように生き生きしてるよ」

そうかなあ、とレイシアは首を傾げる。

「買い物はできるようになったけど、まだまだだよ。料理は上手じゃないし、掃除も洗濯も時間がかかって……」

「君は家政婦じゃないんだろ？」

「そうだけど、家事はするもの」

「本当に家族なんだね。いいお父さんをもったみたいだ」

「変なお父さんなんだよ。中途半端に役に立つ発明品を作る天才なの。ゴーレムを作るのが本業だーって、本人は言ってるけど」

「ゴーレムを？ お父さんの名前は？」

「ラウリス」

イシュドは驚きに目を瞠った。

「ラウリス博士か！ 高名な方だよ……近代ゴーレムの父だと言われているくらいだ」

「お父さんが？ 人違いじゃないかなあ……。のんびりしてる変な人よ」

レイシアの脳裏に浮かぶのは、自分の発明品であるコタツに首から下をもぐりこませて、幸せそうに目をつむる父の顔だった。間違っても偉大な人物ではない。

「僕は会ったことがないから人格は知らないけど……。そうか。それなら君のようなゴーレムも納得できるよ」

「わたしのようなゴーレムって？」

「新しいことを覚えるゴーレムさ。使命のためではなく、生きるために生きるゴーレム。僕も、君もね」

「生きるために……。あつ。わたし、そろそろ買い物に行かなくちゃ！ ご飯食べないと、生きていけないもの」

イシュドは微笑みを浮かべて首肯した。

「そうだね。気をつけて行くんだよ」

「ありがとう。あ、ねえ、イシュド」

「うん？」

「わたしとあなたって、友達？」

「……。ああ。そうだね。同じ街に住んで、名乗りあって、お話をしたんだから。僕たちは友達だ。光栄だよ」

そっか、と頷いたレイシアは嬉しそうに笑顔を見せた。少女の胸の奥で、心臓が あるかどうかは、父に聞かねばわからないが

強く、一度跳ねる。

「へへ。それじゃまたね、イシュド！」

言ってみたかったのだ。「またね」と、誰かに。父とは違う、誰か他人と距離を近づけてみたかった。だからイシュドがまるで父の

ように、見守るような優しい笑みで頷いてくれて、レイシアは嬉しかった。

「ああ、またね。レイシア」

初めてできたゴーレムの友達は、買い物カゴを提げるゴーレムを、優しく見送った。

ふと、目を開ける。

夜の街が広がっていた。闇を煌々と塗りつぶすのは、街灯の薄い光だ。ゴーレムと同じくマナを動力とする街灯は、白に近い青の光を発する。

レイシアが立っていたのは雑多に店の立ち並ぶ大通りだった。石畳を闊歩する馬車の蹄がリズムを刻む。歩道を歩くのはレイシア自身よりも歳上の男女がほとんどで、呆然とする少女を一瞥する視線も多い。

レイシアの胸中は乱れていた。目を開ける一瞬前に見ていたのは、この風景ではなかったのだ。いや。

「何が……」

「レイシア？」

意味をなさないつぶやきは、覚えのある男声で遮られた。見ると、イシュドが怪訝な顔で目を向けている。

「イシュド」

「や、こんばんは。レイシア」

見知らぬ人ばかりの歩く覚えのない風景で、一度会っただけの友人は輝いてすら見えた。つい昨日会ったばかりだというのに、妙な懐かしさすら覚える。

「あ、あの、わたしどうしたの？」

「ん？」

思いきり眉間に皺を寄せるイシュドに、レイシアは激しく首を振る。

「違うの。えっと、なんでわたしはここにいるかイシュドは知ってるのかなって、でも違うね、一緒にいたわけじゃないみたいだし」

「うん、まあ。よくわからないよ。どうしたんだ。落ち着いて考えてみな」

「だから うん。ありがとう」

口を先に動かして、余計に混乱した気がして、レイシアは深呼吸した。

「その調子だよ」

「すーはー。うん。……えーと、つまりわたしはなんでここにいるの？ ってことなんだけど」

「なんでも何も、僕は知らないよ。君と会ったのは昨日が初めてで、今回が二回目。たった今だ」

「やっぱり」

「事情はわからないけど、君は今、どうしてここにいるかわからないってことなんだね。つまり、直前の記憶がない？」

「……うん」

たった数分前の行動すら思い出せないことを頭の中で確認して、

レイシアは

慎重に頷いた。

「なるほど。とりあえず落ち着いたほうがいいね。こっちにおいて非常に冷静な超高性能ゴーレムは、にこりと笑ってレイシアの手を取った。通りの名前すら知らない少女は、右も左もわからずに手を握り返す。血液の代わりに液化マナが巡るゴーレムの手は、握ると人間のように温かかった。

イシュドはのんびり歩く人々の間を縫って進み、やがて隘路へ曲がった。街灯の光が、ほんの少し遠くなる。考えるまでもなく、レイシアにとっては初めて経験する夜の街だ。昼間より少し冷たい空気になるまれた気がして、全身が強張る。気づいてか強く引かれた手が、その気持を押し流そうとしていた。

「怖い？」

「あ」

「どうした？」

「これが、怖いってことなんだね」

吐息するように、イシュドは短く笑った。

着いたのは、ひと気のない小さな公園だった。ベンチがふたつ、すべり台がひとつ。頼りない街灯が、隅から公園全体を淡く照らしている。

レイシアはベンチに腰かけると、長く息を吐いた。

「はぁー……。怖いので、イシュドかと思っただら違った」

「僕は怖いことはしないよ。出会って二日じゃ信憑性はないかもしれないけど。……何が怖かった？」

「暗いの。ねえ、なんで怖いと息をとめちゃうんだろ」

「何かいそうなら気がするからじゃないかな」

「誰か？」

「それが一番怖いね」

「幽霊とか、虫とか」

「ゴレムとか」

「……知らない人は怖いかな。イシュドは平気。なんでだろうね」

「僕が紳士的だからさ」

「いきなり手を繋いでおいて、よく言うね」

「減らず口が僕の真骨頂だからね。どう、少しは落ち着いたかい」

レイシアは、先程までイシュドと繋いでいた右手を自らの胸に当てた。鼓動は早い、不快な早さではなかった。

「うん、平気」

「それじゃ、状況を整理しようか」

イシュドは立ったまま腕を組んだ。

「さつき、なんで太陽通りにいたのかわからないって言ってたね」

「太陽通りっていうのが、さっきの大通りの名前なのね。いろんなお店があって楽しそうだったな」

「我らが太陽王の名を冠する、王城への一本道だよ。初めてだった？」

「太陽王？」

「国王陛下のことだけど……この際、その話はあとにしよう。とにかくレイシアは、なぜかあの通りにいた」

「うん」

「直前の記憶は？」

「太陽通りに行った覚えはないの」

「じゃなくてさ、君が思い出せる一番新しい記憶のこと」

「あ、なるほど。わたしが覚えてるのは……えっと……」

レイシアは首を傾げた。朝起きて、朝ご飯をラウリスと一緒に食べた。それから洗濯をして、掃除をして、お昼ご飯を作って、食べて。

「お昼過ぎに、買い物に出たの」

「お昼過ぎ」

イシュドは左腕を持ち上げて目線に合わせる。銀色の腕時計が細い手首に巻きつけてあった。

「もう八時間も前だね」

「そんな時間なんだ。でもわたし、買い物をした覚えも、太陽通りに行った覚えもないのよ。商店街についた……かどうかも、わかんない」

「道中で何かあった、というよりは」

イシュドは口許に柔らかい笑みを浮かべた。

「起動して日の浅いゴーレムには、たまに起きる症状だね。剥離症状だ」

「ハクリシヨウ？」

「正式名称は長いんだけどね。ようするに、作りたての体に、生まれたてのレイシアの魂がうまく結合していない状態だ。倦怠感、めまいなんかも伴うけど、記憶の脱落が起きることもよくある」

「そんな」

レイシアは思わず腰を浮かせた。青白い光に照らされたイシュドの顔が少し恐ろしげに映る。

「そんなの困る」

「ああ。でもこれは『できたてゴーレム』にしか起きないことだよ。症状が出た場合でも、数日すれば収まるはずだ」

「そうなんだ……。よかった」

「といても」

イシュドはレイシアの肩をつかんで、ゆっくりとベンチに座らせた。

「今は安静にすることが大事だ。君は少し休んで。落ちついたら家まで送るよ」

「うん……」

「どうした？」

「お父さん、心配してるかな」

青年ゴーレムは答えに窮したようだった。昨日出会ったばかりの彼は、レイシアの父を知らない。名前や功績を知っていても、会ったことがあるわけもないのだ。それでもイシュドは言葉を返した。

「……かもね。あちこち探し回ってるかもしれない」

「早く帰らないと」

「そうやって慌てて、またどこも知らない場所に立ちつくした君を見つけるのは勘弁してくれよ」

「あはは。それもそう、だね……。ねえ、イシュドはこの……剥離症？ になったことあるの？」

「生まれたての頃にね。夢心地のまま、何も考えられずにふらふら歩いていったんだ。保護されなかったら、あの時に死んでいたかもしれない」

「そっか……。またイシュドがふらふらしてたら、今度はわたしが見つけてあげるからね」

イシュドは微笑んだが、喜んでいる顔には見えなかった。むしろどこか悲しげなものを感じて、レイシアは首を傾げてしまう。それに気づいたのか、青年は取り繕うように不適な笑みを見せた。

「その必要はないよ。僕は超高性能ゴーレムだからね」

イシュドの手が、レイシアの頭をそっと撫でる。自分のものより大きい、ラウリスのものよりは小さいその手を、不快だとは思わなかった。

「……イシュドは」

なんとなく居心地のよさを感じて、レイシアは口を開く。

「新米ゴーレムに会う度に、こんな風に面倒見てるの？」

青年の手が頭から離れる。熱が離れるようで、少し寒気を感じた。

「そうだなあ。放っておけないような子はね。それに君は特殊なゴ

ーレムだ。普通のゴーレムは生まれたときから生活できる知識と、

ある程度の専門知識を備えてる。レイシアはそうじゃないだろ？」

「そういえば、お父さんがそんなこと言った」

「だから余計に心配なのさ。『eの刻印』が見えなくても、君はゴ

ーレムだとわかりやすいしね」

「『eの刻印』？」

イシュドは頷いて、左腕の袖をまくって見せた。肘より少し上に、

青白い「e」の字が見える。

「なあに、これ」

「ゴーレムの証。伝承の中のゴーレムは、額に『emeth』とい

う文字を持っているんだ。意味は『真理』。作った人間は、そのゴ

ーレムを破壊するとき、頭文字のeを消す。『meth』の意味は

『死』……。それにちなんで、現代のゴーレムも体のどこかに『e

の刻印』を彫るのさ」

「だから、ゴーレムの証なんだ」

「そう。レイシアのどこかにもあるはずだよ。見た覚えがないのな

ら、お父さんに聞いてみるといい。作ったときに彫った本人だしね」

レイシアは自分の服の袖をまくって見たが、両腕のどこにも文字

は見当たらなかった。普段の生活で見た覚えもない。背中にでもあ

るのだろうか、と首をまわして見るものの、当然背中を視界に納め

ることはできなかった。

「さて、そろそろ平気かな」

言って、イシュドは右手を差し伸べた。

昨日出会ったばかりなのに、その仕草には不思議と懐かしさを覚える。思えば、知りもしないのに懐かしいものはたくさんあった。

夕焼けや、見知らぬ街並み、人々、ラウリスの笑顔、イシユドの手の温もり。

「さあレイシア。家に帰ろう」

少女は青年に笑みを返して、その手を取った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7471w/>

泣きはらしたゴーレムに

2011年9月30日03時28分発行